

令和2年5月吉日

「水の都・三島」再生への先進的アプローチ —グラウンドワークを活用した地域総参加のまちづくり—

都留文科大学特任教授・グラウンドワーク三島専務理事 渡辺豊博

はじめに

私の趣味は、NPOの「事務局長・専務理事」です。現在までに9つものNPOの事務局長や専務理事を担ってきました。実は、私は静岡県庁に35年間勤務し、源兵衛川の親水公園化事業の住民参加の計画づくりや富士山静岡空港の建設に携わり、ボランティア専門監やNPO推進室長なども担当しました。エネルギー対策室長時代は浜岡原発に何回も仕事で行ったことがあり、行政の中で貴重な体験と組織論・行政論などの「実学」を学んできました。

しかし、日々の生活実態は、県庁に勤めながら並行して、30年前から、地元のグラウンドワーク三島や三島ゆうすい会などいくつかの市民活動に関わり、富士山での環境保全活動を含め、自称「ミスターNPO」としての専門性と経験知を蓄積・研鑽してきました。

三島市は、昔から「水の都」と呼ばれていましたが、日本が高度成長期に入った昭和39年以降、地下水が減少し、地域の川も汚れてしまいました。この環境悪化の期間は、約25年間にもおよびました。このままでは、ふるさと・三島が駄目になってしまうという危機感をもった多くの仲間たちとともに市民活動に立ち上がり、もう一度、ふるさとの水辺自然環境を再生・復活することを目標として、「グラウンドワーク三島」を設立しました。

「水の都・三島」の環境再生

現在、三島市では、まさに「水の都」を彷彿とさせる「清流」が蘇っています。市内中心部を流れる湧水河川で農業用水路の「源兵衛川」では、毎年、5月から6月までの2ヵ月間で約2000匹のゲンジボタルが乱舞します。これは、約28年間にわたるグラウンドワーク三島を中心とした地域総参加の水辺自然環境の環境改善保全活動の成果の現れ、「証」と自負しています。

しかし、現実的には市町村の皆さんや三島市民の皆さん、地元町内会の皆さん、それからさまざまな市民団体やNPOの皆さん、企業や行政の皆さんが、一体化し総力戦により「水の都・三島」の環境再生に努力してきた成果・結果でもあります。

「水の都・三島」の原風景・原体験の再生と復活を共通の目的とした、パートナーシップの力や地域協働の力、その手法の有効性・有益性を、今さらながら実感しているところです。現在、街中の水辺や飲食店を散策する観光客が増え、観光客の入り込み数も増大して 20 年前と比較して 620 万人と 4 倍近くにも増加しています。

一体、街に何が起きたのでしょうか。是非とも、皆さん、三島に見学に来てください。三島市の中心商店街は、長さが 740 メートルあり、商店が 236 店あります。現在、空き店舗は僅かです。グラウンドワーク三島を中心とした水辺の環境再生活動が、観光振興を誘発し、地域振興へと具体的な形で貢献している先進的な事例ではないかと考えています。

「グラウンドワーク」とは何か

「グラウンドワーク」は、イギリスにおいて 1981 年に始まった社会運動です。当時のイギリス首相であるサッチャーが発案者です。社会を構成する市民・行政・企業が、それぞれの社会的役割と責任を、3分の1ずつ持ち合い、協働する「責任分担」の新たな「社会システム」です。

「市民が3分の1、行政が3分の1、企業が3分の1ずつ持ち合う」この社会システムを考え出したサッチャーの独創性と先導性は、市民と行政と企業とに糊しろをつくるように、その真ん中に「調整・仲介役」の機能・役割を持った「英国グラウンドワーク連合体」、高い専門性と政治的・利害的中立性を内在した組織を創設したことにあります。

この組織が諸課題の「調整・仲介役」となり、三者が上手に得意技を出せるような「パートナーシップ」の社会システムをつくっていくこと、これが「グラウンドワーク」の目的・社会的使命です。サッチャーが 14 年、ブレアが 9 年、キャメロンと次々にイギリスの首相も代わり、設立後、39 年が経過しました。現在の英国グラウンドワーク連合体は、これらの政権から信頼を得て、英国社会を支える必要不可欠な組織としての評価を蓄積し、その存在感と重要性はますます増加しています。

年間の予算規模は 230 億円、職員 2200 名、イギリスの中に 13 箇所のトラスト、出先事務所を開設しています。いわゆる市町村の領域となる行政の最先端・現場・地域に入り込み、地域社会の「歪」「課題」の具体的な解決を図っているのです。

グラウンドワークの最終的なテーマ・ミッションは、「人間的なサービス」の提供です。この人間的なサービスは、一番お金がかかり、一番時間がとられ、一番手間がかかり、ある意味で行政上から言えば、一番非効率な領域・行政サービスの分野といえます。

私も NPO 法人を運営管理していますが、NPO 活動の真価は、実効性や具体性、実現性が高く、効率的で高度な人間的なサービスが弱者に的確に提供できているかだと考えています。

グラウンドワーク三島も地域・町内の中に入り込み、多様な活動を展開してきました。町内会の皆さんの具体的な課題や要望を汲み取り、その地域で何が起きているかを情報収集し、その実態を正確に把握しています。

例えば、「あの歴史的な井戸が埋められそうだ」、「あの貴重な巨木が切られそうだ」、「あの素敵な水辺がコンクリート化されそうだ」、「あの自然度の高い湧水池が埋められそうだ」など、地域住民が抱く懸念や心配、不安、意見、提案について、グラウンドワーク三島が常に監視・情報収集しているのです。これは地域住民との緊密な付き合い、議論を積み重ねているからこそ実現できる実効性の高い「現場の力」を内在しているのです。

このような地域住民の目線に限りなく接近する対応姿勢と比較して、市町村の皆さんは、今の限られた人員とお金の中で、十分な行政サービスを提供できるのでしょうか。信頼のおけるパートナーの育成や連携なくして、さらに多様化・増加し、要望度が高まる人間的なサービスに対して的確な対応ができるのでしょうか。

私は、イギリスに 30 年間で 50 回近く行っています。毎年訪問して驚くことは、イギリスは果てしなく行政組織が「委縮・縮小」していることです。しかし、違った視点からの評価としては、行政が激しく「狡く」なっていると感じています。多様な能力と専門性を持った、そして、街に対する愛情と情熱を持った人たちを、新しい社会の活躍の場、例えば、NPO という新しい自己表現の場を整備・提供して、その舞台に乗せ、その人たちの多様なパワーを地域の中で生かしているのです。

NPO や市民団体が、課題解決のために必要としている事柄を、行政として、法律的な意味、資金的な意味においてカバーしているのです。さらに、行政の役割と認識しているのは、NPO に対しての社会的信用・担保を与えることと理解しており、行政の役割は、その意味でも必要不可欠なものであり、イギリスの行政の戦略性を強く感じます。

グラウンドワーク三島は、今まで 200 社近い企業から、資金・人材・専門性・資機材など、さまざまな支援を受けてきています。地域の商店街の酒屋や靴屋、八百屋、魚屋が賛助会員になっていただき、年間 1 万円を支払っていただいております。このような、企業との連携・信頼を構築していく際に、NPO と行政との信頼関係が構築されていることは、NPO 活動の信用度を高めるためには大変に重要な前提条件になります。

ですから皆さんも、是非とも、自分の地域の中の NPO や市民団体に関心を持ち、多様な形での支援をお願いします。特に、行政は、これらの NPO や市民団体を上手に活用していくための技量やコーディネーターの力を持たなければなりません。NPO や市民団体が活躍する舞台は沢山あります。多様な課題も山積です。人材もいるのに活用されていません。これらの地域の潜在力・可能性を社会の主演といたしますか、サービスの担い手として、きちんと躍り出るような環境整備を、行政の責任と自覚して対応していただかないと、今後、夕張市のような財政破綻を招き、地域住民に対して、「高負担と低サービス」を強いる悲しい結果に直面してしまいます。

夕張市の方が、この会場にいらっしゃるかもしれないので申し訳ないですが、夕張市は財政再建団体となり、令和7年までに約385億円を国に返還していかなければなりません。先人の暴走のつけを今の住民が負っているのです。

夕張市民病院も縮小されました。そこに居た、ある高齢者の方は元炭鉱夫でした。夕張に住んで70年。しかし、糖尿病にかかりも左手と右足を失いました。今は、透析をしなければいけない中で、「夕張市民病院で死にたい、ふるさとで死にたい」と、強い希望を持っていながら、その夢は果たせず、結局は市外の病院に移送れてしまいました。最後に、私にお話をしてくれたのは、「私は、もう死なないと夕張には戻れない身になってしまった」この悲劇は行政の傲慢と暴走、住民との乖離などにより引き起こされたものです。

そういう意味では、先を見据えた、セーフティーネットや新しい社会システム、将来的な街の再生やよりきめの細かい弱者に目線が届く住民サービスのシステムづくりを、お金がない中でどのようにつくっていくかという、将来的な「全体ビジョン・アクションプラン」を地域住民の責任と発意・主導性により、創り上げなければならないのです。

多様な人材を活用する仕事

グラウンドワーク三島での私の仕事は、市民の能力を高め、専門性を発揮・還元させる仕事です。資金も乏しく、社会的信用も希薄です。しかし、私個人は、結構、口が達者です。この能力も、社会的には、大きな得意技になります。仲間の中には、文章を書くのがうまい元公務員がいます。土建屋出身で物を作ることがすごくうまい人もいます。

私の小学校の同級生のおばちゃんは、料理がとても上手です。この専門性・能力を発揮して、10年ほど前から、お店を3店経営してきています。そして、60歳以上のおばちゃんやおじちゃんを15人以上も雇用してきています。これで1日10万円前後の売り上げを

計上しました。お店の経営者の感覚であり、「NPO ビジネス」を収益事業と位置づけ経営してきました。

NPO も、無償でニコニコして、霞を食って活動を続けていくことは不可能です。NPO において高齢者の人的資源を活用しながら、高齢者でも元気のいい料理上手なおばちゃんを使用しながら、お総菜をつくり 200 円で販売し、買い物に行けない一種の「買い物難民」といいますか、中心市街地の「限界集落」の高齢者に対してお届けしたり、買い物に来てもらっています。その販売商品は、グラウンドワー三島が箱根西麓の耕作放棄地を活用した農業再生ビジネスで作っている無農薬・有機野菜です。

日本は、本来、世界的に比較しても「人材の宝庫」だと思うのですが、現実社会は、「人材の倉庫」になってしまっています。高校や大学時代、勉強しろ、勉強しなくては立派なところには就職できないと言われてきましたが、現実社会においては、どうやって、それぞれの能力や適性、個性、専門性などを発揮・活用させていつたらいいのでしょうか。女性も潜在的な素晴らしい能力を持っていますし、若者は大きな夢と情熱、行動力を持っているのに、一体、社会のどこで生かせばいいのでしょうか。

皆さん、ご存じですか。都内の某一流大学の政治経済学部を卒業して、3 年以内に会社を辞める率って何パーセントかご存じですか。7 年前に 23% だったのが、今は 32% です。みんな一流の会社に入って 3 年間持たないのです。フリーターになって、社会的に役に立たなくなってしまう、人材的にもったいないと思いませんか。

イギリスのトラストへ行きますと、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学、ウェールズ大学、バーミンガム大学等々の、日本で言うと超一流難関校の大学生が NPO に実習に来ています。GAP（ギャップ）イヤー（大学入学が決まっている学生が 1 年程度入学を延期し、その間にボランティアや職業体験、旅行などを通じて社会的な見解を広げる制度）というのですけれども、日本は、そういう制度もないので、社会学を勉強する機会が乏しくなってしまいます。社会の最前線で、社会がどう動いているのか、人々がどのように動き、社会的な役割を果たしているのかを十分に理解することができません。

グラウンドワーク三島では、以前、内閣府の復興支援型地域社会雇用創造事業により 52 名の被災者の起業支援を行い、被災地において起業していただきました。今、石巻においては、NPO に対する地域の評価には厳しいものがあります。玉石混交の耳の痛い話ばかりです。岩手県山田町においては、多額の補助金を不正使用したとして、ある NPO がよくテレビで放映されています。

会計や活動成果において問題を抱えている NPO も多く、NPO で頑張ってきた私としては、大変に悔しい思いもあります。しかし、これをもって NPO の全部が駄目だとか、そんなふうに皆さんは思っていない。どんな世界にでも氷山の一角、光と影が必ずあるわけです。

新しい社会の仕組み

日本のこれからの新しい社会の仕組みについて、皆さんは、どんなイメージをお持ちですか。例えば、大きな丸は社会的なサービスの丸です。その中に、「市民」と「企業」と「行政」の3つの丸があります。行政が財政難となり委縮・縮小すると、社会に「すき間」ができます。すき間ができると、社会的なサービスが低下・劣化することになります。社会的な「歪」がどんどん大きくなっていきますから、最終的には、やっぱり NPO に頼らざるを得なくなります。すき間を埋める新たな担い手・サービスの提供者が必要になるのです。しかし、NPO は、総じて人、金、物、組織のマネジメントが脆弱です。

そこで、もう一つの丸を、イギリスのグラウンドワークのように作る。その有益性と有効性をグラウンドワーク三島において社会実験してきました。本年、本会を設立して 28 年目になりますが、それなりに組織と活動が展開されてきていると自負しています。

今後とも、この4者の有機的な連携の仕組みは、多様な可能性と発展性を秘めていると評価しています。私は、県庁で5年間にわたり NPO 推進室長を担ってきた経験上、行政による上からの目線ではなくて、地域の足元から NPO や市民団体の力を借りて、社会的なサービスを創り上げていく、新たな仕組みが必要と認識しています。

そのような民主主義の原点である主権在民の基本的なスタイルを、もう一度つくり直さないと、防犯や防災、環境、福祉、国際交流やスポーツ交流など、どのような視点・側面から考えてみても、行政の限界が近づいてきていると感じています。

イギリスの場合は、三つの丸を作ります。上に「行政」を書き、下に「企業」を書いてください。この真ん中に双方にダブって、「NPO・社会的企業」が存在するのです。行政は、「公益的なサービス」の提供者です。原資は税金です。企業は、「私益的なサービス」の提供者です。原資は料金です。それでは、この真ん中は一体何なのでしょう。これらのターゲットは、「人間的なサービス」になります。そして、この原資は市民自身なのです。市民自身がサービスを提供し、稼ぎ、雇用を生み出し、多様な知恵を出すのです。

この真ん中の丸を、イギリスでは、「中間労働市場」と呼びます。イギリスの人口は日本

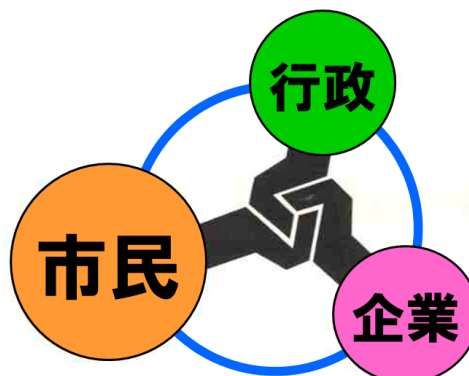
グラウンドワーク三島のシステム

・ **市民**・・・現場で汗を流す
市民力・地域力を結集

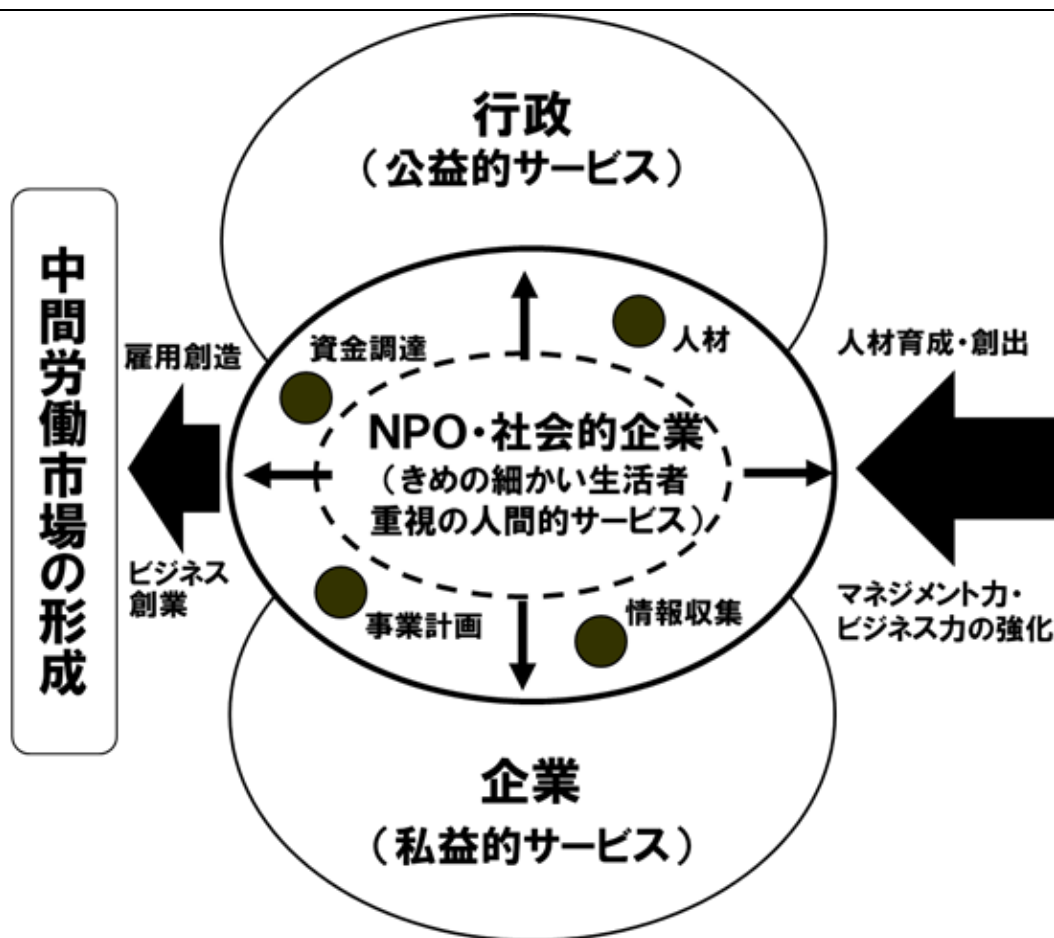
・ **企業**・・・協力する
専門性を発揮、資機材提供

・ **行政**・・・支援する
資金援助・制度的支援・物的支援

・ **グラウンドワーク三島**・・・調整・仲介する
中立的・専門的な支援と役割



グラウンドワーク三島



グラウンドワーク三島の活動手法

- ① ボトムアップアプローチ(下から上へ、現場主義、実践・成果主義)
- ② パートナーシップアプローチ(市民・NPO・行政・企業との有機的な連携)
- ③ ネットワークアプローチ
(多様な市民団体、NPO同士の連携、共存共栄・相互補完の仕組み)
- ④ ホリスティックアプローチ(人の心を変えること、自立、自律への社会教育)
- ⑤ マネジメント力(保護から保全・活用へ、環境と経済との両立)
- ⑥ ビジネス力(地域資源を活用したNPO・市民ビジネスの創業)
- ⑦ キャパシティビルディング(住民の政策立案・執行能力の育成)
- ⑧ 儲かる・稼ぐNPOへ(小さな産業の起業、雇用の確保と生きがいづくり)
- ⑨ 地域経営の主体者(未開発の農業・環境・文化・歴史・景観資源の活用)
- ⑩ 人間的サービス提供の担い手(死にがいのあるまちづくりの先導者)

※地域は誰のものかの問題意識と具体的な行動力

70箇所
(27年間)



グラウンドワーク三島の
プロジェクト実践地

の半分の 6,000 万人弱ですが、この内の 600 万人ほどがここで働いています。今、日本の失業率が 4% ぐらいで 250 万人位ですか。高校から学校に行っていない子、通信教育を受けている子が 40 万人近くいます。内閣府の調査では、3 カ月以上家に閉じこもっている 19 歳から 40 歳までの人たちが 100 万人近くいます。単純に足し算したら 390 万人位の日本人が働いていないこととなります。自己表現のフィールドがないのです。再雇用の仕掛けも貧弱です。多くが生活保護者予備軍ともいえます。社会保障への依存度が高くなります。これらの社会的な弱者を確実に支えていけるほど、日本は資金が豊かなのでしょうか。消費税増税の政策・手法に頼るだけなのでしょうか。

イギリスも実は、今から 20 数年前は日本の状況と酷似していました。そこで彼らが考え出したのが、「中間労働市場」創設の仕組みです。ここには、市場性があり、多様な資金が流入・循環します。NPO に対して資金が融資・投資されるのです。

グラウンドワーク三島は、毎年国の補助事業として 1,000 万円とか 2,000 万円の事業を受けてきています、7 年前は 10 億円の事業を受けました。これは事前に資金を頂いたので問題はなかったのですが、普通の補助事業は、資金がいただけるのは 1 年後の 5 月か 7 月になります。資金を借りなければ事業はできません。運転資金がないと活動が続きませんから、民間の金融機関から資金を借りてしのいできました。

しかし、この資金確保は、大変な手間がかかります。生意気ですけど、28 何年もこんなに頑張っただけで日本中のまちづくりの賞を取って、国の 10 億円もの仕事もこなし、会計検査に褒められたこともあります、こんな信用度のある NPO になかなか資金を貸してくれません。結局、理事長とか私が、個人的な資産を担保に入れなければ NPO に資金を貸さない、このような日本社会にはイギリスのような NPO の市場性はありません。

イギリスの場合は「NPO ファンド」があり、大体 6,000 億円から 7,000 億円の資金が動いています。国が多くの資金を出しています。政府と民間資金を、NPO・社会的企業に対して、どんどんと融資・投資しているのです。事業計画書を作って、銀行と同じように収益分布を出し、こうやってやるからこうやってお金が集まりますと説明しています。

正直言って、事業をやってお金が入ってくるので、社会の中でどんどんと人を雇用して、挑戦・起業できます。彼らの言葉は、社会が混乱して、行政が停滞して機能が劣化・低下すればするほど、われわれに取っての「ビジネスチャンス」が到来するという発想です。社会全体としてサービスが共有、提供できれば、それでいいと思います。行政という存在は必要不可欠です。イギリスもそうですし、絶対的な存在です。しかし、社会全体として、

多様な社会的なサービスが循環・還元すれば、効率的で合理的な仕組みが新たに出来上がるのです。高齢者や若者・女性などが自分の事情や特性・能力、専門性に合わせて働ける職場が用意されている社会なのです。

その半分、53%は女性の職場です。イギリスに行って、NPO の事務局長、所長さんに会ってみてください。ほとんどが女性です。社会のために働こうとする、やる気に満ち溢れた元気のいい女性がほとんどです。一緒にビールを飲みに行ったら、すごい迫力です。後の半分、25%は若者であり、後の 25%は高齢者です。

マンチェスター市の北に「グラウンドワーク・オールダム&ロッチデール」という 50 万人規模のトラストがあります。そこの副所長はシェル石油の元・副社長です。年収 1 億 8,000 万円もらっていた人が、自分のふるさとへ帰ってきて、どうして地域活動をするのですかと聞くと、63 歳で、シェル石油の中で副社長、いわば社長候補だったわけですが、戻って、ふるさとのためにいわゆるビジネスという力、ビジネスという自分の専門性を生かして、このトラストを充実させたいということでした。だが、ボランティア・無償ではなく、年収 1,000 万円位もらっています。日本においては、そのような有償の NPO ビジネスの仕組みがあるのでしょうか。

NPO と市町村

今後の行政の役割を考えた時に、生活者・納税者と直接的に対峙する市町村の役割は、格段に向上すると考えています。私も県庁時代に市町村職員の皆さまとは、常に情報交換し、相互の立場と役割を認識・共有しながら、現場感覚を重視した仕事をしてきたつもりです。当然、役割を考えた時、市町村職員は、やはり地域の実態を正確に把握していないと的確な仕事はできません。また、多様な事柄の総体的な関係も理解できる能力も身につけてはなりません。それから、現実的な地域情報を収集すべく、消防団への入団や子どものスポーツクラブでの指導、お祭りや地域活動への参加なども求められます。

例えば、NPO の関係で説明します。三島市には、小・中学校が 21 校あり、生徒数は、1 万 2,000 人になります。ある時に、グラウンドワーク三島は、三島市のすべての小中学に源兵衛川で川遊びをしてもらおう目標を立てました。その目標を実現するために、「PTA 略奪作戦」を立案しました。グラウンドワーク三島の役員が、「小、中学校の PTA 会長になる。そうすれば、閉鎖された学校から校外の源兵衛川に誘導できる。」というものです。

私も中学校の PTA 副会長をやりました。7 年かかりましたが、市内すべての子ども 1 万

2,000人を源兵衛川に連れていき、川で自由に遊んでもらうことができました。

行政においては、このようなことが実現できますか。「環境が大事だ、水辺自然環境は素敵だ、水辺は楽しい」と先生は発言とますが、現場には近づきません。環境 NPO と連携して、実践的な環境教育を実践するプログラムを子どもたちに提供することは困難です。

行政の教育に関わる新たなアプローチのあり方・試行への提案として、多様な NPO との連携や協働を進めませんか。実践的な環境教育のプログラムの内容や質を相互の経験知を出し合い、高度なものにしませんか。また、安全・安心な持続性の高い教育システムを一緒に創り上げませんか。これらのアプローチが NPO との連携の新たな仕組みなのです。

以後、グラウンドワーク三島の活動をパワーポイントにて概要説明します。

「グラウンドワーク三島」の具体的な活動とは

グラウンドワーク三島の活動が始まった理由は、「水の都・三島」の水辺自然環境が汚れ、傷つき、今後、もう再生できない、ぎりぎりまでの追い詰められた危機的な状況になってしまったことによります。この事態は大変に悲しい事実です。しかし、それが現実でした。

人間はやっぱり最終的に社会に何を貢献するかだと思うのです。物事の変化に単純に怒る人間って大事だと思います。私の同級生や仲間たちは、汚れたふるさとの変化に怒り狂ったのです。誰に怒り狂ったかという、これまでの自分に対して怒り狂ったのです。「自分は何をしてきたのだ。県庁で毎日酒を飲んで、楽しんでいるだけじゃないか」こんなことをやっていたのかという強烈な反省・懺悔の気持ちから物事が始まっています。

バブル時代は、ばんばんお金を使う、イケイケバンバンの時代だったじゃないですか。何でもいから、コンクリートを使い、ダムや道路、橋、水路などを造る、行政の暴走がまかり通っていました。こんなことでは、ふるさが駄目になってしまう、もう少し冷静に地域の実態を把握し、現実を見つめ直し、自分たちで何ができるのかを再考しようとしたのが、追い詰められた、グラウンドワーク三島の基本的な姿勢・考え方でした。

そして、その推進役として、バラバラだったいろいろな市民団体を一つに束ね、20の市民団体が一体となり設立されたのが、グラウンドワーク三島なのです。

これが三島市の概要です。三島駅、新幹線と東海道線の両方の駅があります。菰池と楽寿園小浜池が湧水河川の水源池です。これが源兵衛川であり、「水の都・三島」の原風景です。これは桜川ですが、当時は満々と湧水が流れていました。

何のためにグラウンドワーク三島の活動をやるのかと言われた時に、明確に「水の都・

三島」の原風景と原体験を再生・復活するためと説明してきました。実は、汚れた川や街を長い間見てきた人たちは、昔の美しい水辺の風景を知らないし、拘りの気持ちや愛着心もありません。何かに怒り、戦っていくための基盤・社会的な背景・理由づけがないのです。「こんな市民活動、何のためにやるのですか。頑張る意味があるのですか。本当に実現できるのですか」という消極的な諦めが優先した話になってしまうのです。そこで、いや「こういう源風景をもう一度工夫を重ね取り戻そう」と熱心に執拗に説得を続けました。

洗濯している人たちは、現在、「千の風」になってしまいました。これは、三島女郎衆・芸者さんです。このような水辺の浮かぶ水船で生ビールを飲んで楽しむ情緒です。こんな原風景を戻したいと熱望したのです。

これが源兵衛川ですし、これは「広瀬楼」という料亭です。水の上に建っているピロテター（飲食店で1階に駐車場、2階に客席や厨房を設置した設計）ですね。こういう形式の水辺の料亭が沢山あり、こんな風景が、人を和ませ、優しくしてくれます。

これが宮さんの川ですが、実はこの中に私も泳いでいます。三島の学校には昭和40年代までプールがなく、川で泳いでいました。富士山からの湧水が、三島っ子の人格形成や個性・特性などをつくってきた、そのような水辺の風景への再生に取り組みました。

しかし、昭和39年以降、「水の都・三島」から湧水が消えていきました。しかし、この水餓鬼たちの幸せそうな満面の笑みを見てください。何を求めて、人は生きていくのでしょうか。豊かな昔の水辺自然環境が、そのまま地域に存在していれば、人の心は優しくなりますし、虫や生き物たちを大切にする人間的な思いやりの心を身につけることができます。昔の親は、子どもの世話もろくにしてくれませんでした。しかし、昔の人は、いろいろな物を大切に慈しみ、礼儀を重んずる、人格教育をしてきました。

これが楽寿園の小浜池であり、湧水の重要な水源池です。富士山からの湧水が一年中湧きだし、池からあふれていました。今は、一年中、湧水が湧かなくなっていました。三島の宝物である湧水が、50年の間に街から消えてしまったのです。

これが、グラウンドワーク三島が環境再生に関わった、源兵衛川です。昔は、湧水があふれ、怖いようにまんまんと流れていました。しかし、昭和39年頃になると、あの美しかった源兵衛川が、こんなに汚れた川になってしまいました。これが、全く同じ場所から取った写真だと理解できますか。あの右側のコンクリート護岸の曲線同じですね。湧水が減少してしまい、下水道に接続しない川沿いの家庭から雑排水が垂れ流され、油が浮き、ごみが放棄され、こんなに汚れた醜い状態が、約26年間も続いたわけです。

このような厳しい状況の中で、源兵衛川を維持管理している中郷用土地改良区や地域住民、行政側からは、水質汚濁防止法に準拠して、この農業用排水路を用排分離にすべく暗渠にして隠してしまう提案がなされました。汚いものに蓋をしろの発想です。これとはんでもない暴挙です。戻すなら、昔の原風景や水辺自然環境に戻さないと、源兵衛川の本質性が失われてしまうとの危機感から、グラウンドワーク三島の運動が始まったのです。

皆さんの地域にも、三島の事例に類似した場所や事態が存在しませんか。これから、さらに、源兵衛川的环境再生への「戦略的アプローチ」を話し始めると、何時間も必要になってしまいます。現実的には、まず、源兵衛川に入って、ごみ拾いを毎日行いました。地域住民に環境に対する問題意識を持ってもらうために川沿いの13の町内会、流域に住む2万人の人々に対して、「水の勉強会」を3年間で約187回の勉強会を開催しました。

昔はこんな清水性のトンボが生息していた。しかし、今は汚水性のトンボが4種類しか生息していないなどの内容の勉強会を繰り返していったわけです。専門性と問題意識を高め、具体的な実践活動・ごみ拾いも継続的に進めたことにより、先ほどの汚れた場所が、現在、このような清流に劇的に再生しています。ごみ1つなく、子どもたちが裸足で泳げる美しい川に変身したのです。皆さん、これがあの汚れていた同じ場所です。

ここに水辺を散策できる「水の散歩道・遊歩道」がつくられ、人々が気軽に歩けるように工夫されています。延長1.5キロ、農林水産省から15億円の事業費を受け、「都市と農村を結ぶ水の道」をコンセプトにした整備を行いました。まさに、行政の力、住民のアイデア、企業の支援、この三者のパートナーシップの力とグラウンドワーク三島の調整・仲介役の役割とが見事に融合・一体化したことにより、清流が再生・復活し、現在、蛍が3000匹も乱舞するまでになりました。

奥にボーッと明かりが見えるのは飲み屋街です。飲み屋街の横を通っている川で、蛍が毎日200匹飛ぶ街って日本中にありますか。この場所は新幹線を降りて歩いて10分の距離にあります。どんな困難や課題も、全力で取り組めば解決できます。グラウンドワーク三島の多様な取り組み手法が、市民力・地域力の実力・解決力を実証しています。

まとめとして、「水の都・三島」の環境再生のポイントをお話しします。まず、関係者同士の中で、共通の理念や使命を明確化することです。また、街をどのように変革していくのか、中長期の視点に立ったアクションプランを戦略的に策定することです。さらに、さまざまな情報収集を行い、それらを分析・評価し、課題を的確に整理して将来の方向性を見定めた道筋を、関係者の合意形成を前提として構築していくことです。

最後に、一体誰が、どんな組織が、最終責任を負い、多様な役割を担っていくのかを明確にしなければなりません。組織を支えていくには資金力が重要です。そういう意味では、NPO のいわゆる営利性や収益性を高めながら、資金が循環して人を雇用し、活動が持続できるような営利活動と非営利活動のバランス調整に挑戦していくということになります。

おわりに

最後になりますが、グラウンドワーク三島の合言葉は、「右手にスコップ、左手に缶ビール」、「議論よりアクション」、「走りながら考える」ということです。現在までに 60 カ所の実践地を実績として持っています。「小さな形も残せない組織は、口だけだ」というのが、グラウンドワーク三島の信条です。いくら議論や総論を語ったとしても、現実的に何をすればいいのか、明確でわかりやすい具体的な代替案を出せないような議論は時間の無駄です。特に地域住民と連携して活動を展開しており、成果と実績を残すことが目標です。

常に、活動を通して、グラウンドワーク三島に突き付けられる刃は、「貴方たちはそんなに偉そうなことを議論・発言したって具体的に地域に何を残せたの」ということです。資金はあまりありません。しかし、専門性はあり、話の中で理想の絵も書けます。環境調査にも対応できます。この臨機応変性が NPO の真価だと考えています。

皆が協力し合って、沈滞しているふるさとを元気にしていくのです。主役は要らず、誰がやったのかも無関係です。街が結果的に良くなればいいことです。これからはやっぱり街を具体的に変革していくための社会的な新たな仕組みを、地域の人たちによって創り上げていかななくてはなりません。形を残すことで達成感と満足感を感じ、連携・協働すれば自分たちもやれるのだという、街づくりへの自信を醸成していくのです。

これからの行政に必要なのは、人を育てる力、人に自信を持たせる力だと思います。そして、その人たちが自分たち自身で動き始めたときのフィールドを用意する力、そういう対応力が求められています。これには、お金はあまりかかりません。地域の人たちが仲良く、支え合って生活できるような共助社会を創り上げていただきたいと期待しています。

グラウンドワーク三島の 28 年の歳月をたどりますと、10 年間は環境再生と地域再生に取り組み、その後、農業再生、そして現在は、コミュニティー・ビジネス、NPO ビジネスに取り組んでいます。私の仕事は NPO の社会的評価を高めることだと自覚しています。是非とも、NPO の活動を理解していただき、多様な社会的課題に挑戦している現場最前線の NPO の皆さんを全面的に応援していただきたいと期待しております。